

納豆合戦

菊池寛

青空文庫

皆さん、あなた方は、納豆売の声を、聞いたことがありますか。朝寝坊をしないで、早くから眼をさましておられると、朝の六時か七時頃、冬ならば、まだお日様が出ていない薄暗い時分から、

「なつと、なつとう！」と、あわれつぽい節を付けて、売りに来る声を聞くでしょう。もつとも、納豆売は、田舎には余りいないようですから、田舎に住んでいる方は、まだお聞きになったことがないかも知れませんが、東京の町々では毎朝納豆売が、一人や二人は、きつとやって来ます。

私は、どちらかといえば、寝坊ですが、それでも、時々朝まだ暗いうちに、床の中で、眼をさましていると、

「なつと、なつとう！」と、いうあわれつぽい女の納豆売の声を、よく聞きます。

私は、「なつと、なつとう！」という声を聞く度に、私がまだ小学校へ行っていた頃に、納豆売のお婆さんに、いたずらをしたことを思い出すのです。それを、思い出す度に、私

は恥しいと思います。悪いことをしたもんだと後悔します。私は、今そのお話をしようと思えます。

私が、まだ十一二の時、私の家は小石川の武島町にありました。そして小石川の伝通院のそばにある、礪川学校へ通っていました。私が、近所のお友達四五人と、礪川学校へ行く道で、毎朝納豆売の盲目のお婆さんに逢いました。もう、六十を越しているお婆さんでした。貧乏なお婆さんと見え、冬もボロボロの裕を重ねて、足袋もはいていないような、可哀そうな姿をしていました。そして、納豆の苞を、二三十持ちながら、あわれな声で、

「なつと、なつとう！」と、呼びながら売り歩いているのです。杖を突いて、ヨボヨボ歩いている可哀そうな姿を見ると、大抵の家では買ってやるようでありました。

私達は初めのうちは、このお婆さんと擦れ違つても、誰もお婆さんのことなどはかまいませんでしたが、ある日のことです。私達の仲間で、悪戯の大將と言われる豆腐屋の吉公という子が、向うからヨボヨボと歩いて来る、納豆売りのお婆さんの姿を見ると、私達の方を向いて、

「おい、俺がお婆さんに、いたずらをするから、見ておいで。」と言うのです。

私達はよせばよいのにも思いましたが、何しろ、十一二という悪戯盛りですから、一体吉公がどんな悪戯をするのか見ていたいという心持もあつて、だまつて吉公の後からついて行きました。

すると吉公はお婆さんの傍へつかつかと進んで行って、

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」と言いました。すると、お婆さんは口をもぐもぐさせながら、

「一銭の苞ですか、二銭の苞ですか。」と言いました。

「一銭のだい！」と吉公は叱るように言いました。お婆さんがおずおずと一銭の藁苞を出しかけると、吉公は、

「それは嫌だ。そっちの方をおくれ。」と、言いながら、いきなりお婆さんの手の中にある二銭の苞を、引たくつてしまいました。お婆さんは、可哀そうに、眼が見えないものですから、一銭の苞の代りに、二銭の苞を取られたことに、気が付きません。吉公から、一銭受け取ると、

「はい、有難うございます」と、言いながら、又ヨボヨボ向うへ行つてしまいました。

吉公は、お婆さんから取つた二銭の苞を、私達に見せびらかしながら、

「どうだい、一銭で二銭の苞を、まき上げてやったよ。」と、自分の悪戯を自慢するように言いました。一銭のお金で、二銭の物を取るのには、悪戯というよりも、もつといけないう悪いことですが、その頃私達は、まだ何の考かんがえもない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことをでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイ有難うございます、と言ったねえ、ハハハ。」と、私が言いますと、みんなも声を揃そろえて笑いました。

が、吉公は、お婆さんから、うまく二銭の納豆をまき上げたといっても、何も学校へ持つて行って、喰たべるというのではありません。学校へ行くと、吉公は私達に、納豆を一掴つかみずつ渡しながら、

「さあ、これから、戦いくさごっこをするのだ。この納豆が鉄砲丸てつぱうだまだよ。これのぶつつけこをするんだ。」と、言いました。私達は二組ふたくみに別れて、雪合戦ゆきがっせんをするように納豆合戦をしました。キヤツキヤツ言いながら、納豆を敵に投げました。そして面白い戦ごっこをしました。

あくる朝、又私達は、学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。すると、吉公

は、

「おい、誰か一銭持つていないか。」と言いました。私は、昨日きのうの納豆合戦の面白かったことを、思い出しました。私は、早速さっそく持つていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、昨日と同じようにして、一銭で二銭の納豆を騙だまして取りました。その日も、学校で面白い納豆合戦をやりました。

二

その翌日です。私達は、又学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢あいました。その日は、吉公きちこうばかりではありません。私もつい面白くなって、一銭で二銭の苞つとを騙だまして取りました。すると、外ほかの友達も、

「俺おれにも、一銭のをおくれ。」と、言いながら、みんな二銭の苞を、騙して取りました。お婆さんが、

「はい、有難うございます。」と、言っているうちに、お婆さんの手の中の二銭の苞は、見る間まに二つ三つになってしまいました。

そのあくる日も、そのあくる日も、私達はこのお婆さんから、二銭の苞を騙して取りました。人の良いお婆さんも、家へ帰って売上げ高を、勘定して見ると、お金が足りないので、私達に騙されるのに、気がついたのでしょうか。そつと、交番のお巡査さんに、言いつけたと見えます。

お婆さんが、お巡査さんに言ったとは、夢にも知らない私達は、ある朝、お婆さんに出くわすと、いつもの吉公が、

「さあ、今日も鉄砲丸を買わなきゃならないぞ。」と、言いながら、お婆さんの傍へ寄ると、

「おい、お婆さん、一銭のを貰うぜ。」と、言いながら、何時ものように、二銭の苞を取ろうとしました。すると、丁度その時です。急に、グググツという靴の音がして、お巡査さんが、急いで馳けつけて来たかと思うと、二銭の苞を握っている吉公の右の手首を、グツと握りしめました。

「おい、お前は、いくら納豆を買ったのだ。」とお巡査さんが、怖い声で聞きました。いくら餓鬼大将の吉公だといって、お巡査さんに逢つちや堪りません。蒼くなって、ブルブル顫えながら、

「一銭のです、一銭のです。」と、泣き声で言いました。すると、お巡査さんは、

「太い奴だ。これは二銭の苞じやないか。この間中から、このお婆さんが、納豆を盗まれる盗まれると、こぼしていたが、お前達が、こんな悪戯いたずらをやっていたのか。さあ、交番へ来い。」と、言いながら、吉公を引きずって行こうとしました。吉公は、おいおい泣き出しました。私達も、吉公と同じ悪いことをしているのですから、みんな蒼くなって、ブルブル顫えていました。すると、吉公はお巡査さんに引きずられながら、「私一人じゃありません。みんなもしたのです。私一人じゃありません。」と言っていました。するとお巡査まわりさんは、恐い眼で、私達を睨にらみながら、

「じゃ、みんなの名前を言つてご覧。」と言いました。そう言われると、私達はもう堪らなくなつて、

「わあッ。」と、一ぺんに泣き出しました。

すると、傍そばにじつと立っていた納豆売のお婆さんです。私達が、一緒に泣き出す声を聞くめくらと、急に盲目の眼を、シヨボシヨボさせたかと思うと、お巡査さんの方へ、手さぐりに寄りながら、

「もう、旦那だんなさん、勘忍かんにんして下さい。ホンのこの坊ちゃん達のいたずらだ。悪気わるぎでした

のじやありません。いい加減に、勘忍してあげてお呉くんなさい。」と、まだ眼を光らしているお巡査さんをなだめました。見ると、お婆さんは、眼に一杯涙を湛たえているのです。お巡査さんは、お婆さんの言葉を聞くと、やっと吉公の手を離して、

「お婆さんが、そう言うのなら、勘かん弁べんしてやろう。もう一度、こんなことをすると、承知をしないぞ。」と、言いながら、向うへ行つてしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「さあ、坊ちゃん方、はやく学校へいらつしやい。今度から、もうこのお婆さんに、悪いたず戯らをなさるのではありませんよ。」と言いました。私は、お婆さんの眼の見えない顔を見てみると穴の中へでも、這はい入りたいような恥しさと、悪いことをしたという後悔とで、心の中が一杯になりました。

このことがあつてから、私達がぷつぷつと、この悪戯やを止めたのは、申す迄までありません。その上、餓鬼大将の吉公さえ、前よりはよほどおとなしくなったように見えました。私は、納豆売のお婆さんに、恩返しのため何かしてやらねばならないと思いました。それでその日学校から、家うちへ帰ると、

「家では、納豆を少しも買わないの。」と、お母つかさんに、ききました。

「お前は、納豆を喰べたいのかい。」と、お母さんがきき返しました。

「喰べたくはないんだけれど、可哀そうな納豆売のお婆さんがいるから。」と言いました。

「お前が、そういう心掛で買うのなら、時々は買ってもいい。お父様は、お好きな

方なのだから。」と、お母さんは言いました。それから、毎朝、お婆さんの声が聞えると、

お金を貰って納豆を買いました。そして、そのお婆さんが、来なくなる時まで、私は大

抵毎朝、お婆さんから納豆を買いました。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1989（平成1元）年10月15日48刷

底本の親本：「赤い鳥 復刻版」日本近代文学館

1968（昭和43）年～1969（昭和44）年

初出：「赤い鳥」

1919（大正8）年9月号

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

納豆合戦

菊池寛

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>